

愛知・下津北山遺跡
おりづきたやま

1 所在地 愛知県稲沢市下津北山町・下津南山町・下津小井戸町

2 調査期間 一九九六年(平8)五月～九月、一九九七年二月～一九九八年三月

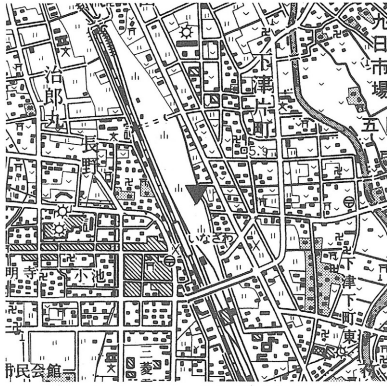
3 発掘機関 (財)愛知県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 高橋信明・大崎正敬・加藤博紀・早野浩二

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 古墳時代～近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(名古屋北部)

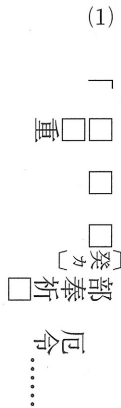
下津北山遺跡は、木曾川の分流である青木川によって形成された微高地とそれらに囲まれた後背湿地に立地する。遺跡の約二・五km西には尾張国府跡が所在する。発掘調査は、尾張西部都市拠点地区開発に伴い、二年次にわたって実施した。

調査面積は計四一〇〇㎡である。

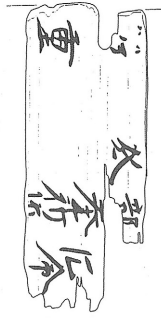
検出遺構は、中世初頭(二世紀後半)、中世前期(二～四世紀)、中世後期(四～一五世紀)の三時期に区分される。中世初頭には、南北五〇mに及ぶ不定型な方形区画と、区画内に配された掘立柱建物を中心とした遺構群が展開する。

木簡は、一九九七年度の調査において、方形区画南溝から出土した。南溝には、「僧」「仏」「上」などと墨書した山茶椀三〇点以上、「大」と刻書した山茶椀一点、緑釉円塔一点を含む大量の遺物も投棄されていた。また、方形区画内の廃棄土坑には、「僧」「見」「上」などと墨書した四〇点以上の山茶椀、陶硯三点(風字硯一点・方形硯二点)が投棄されていた。これらに加えて、方形区画とその周辺には、猿投常滑窯陶器三筋壺・水注・片口小瓶・子持器台、青銅製提子の環座金具など、宗教的な色彩が濃厚な遺物が多数分布することから、中世初頭には寺院が存在していたことが推測される。

8 木簡の積文・内容



五部
(50+13)×(124)×4 081



(配置は推定)

木簡は、接合しない二片と墨痕が確認できない一片があるが、元来は一点の木簡だったものと推定した。全体の形状は不明であるが、文字が記された二片はそれぞれ木簡の右端、左端に相当すると考えられる。材質はヒノキの板目材で、木目方向を横位にして文字を記す。墨痕は総じて不明瞭で、全体の文意は不明であるが、中世の寺院とする前述の推定と関わる語句が散見する。

なお、釈読にあたっては、稲沢市教育委員会の愛甲昇寛、名古屋大学の稲葉伸道、名古屋短期大学の上村喜久子、岐阜聖徳学園大学の清田善樹、日本福祉大学の福岡猛志、中京大学の村岡幹夫の各氏よりご教示を得た。

9 関係文献

(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター『下津北山遺跡』(二〇〇〇年)

(早野浩二)